

第3回 世界を覆う食料問題

～世界規模の農業・食料流通の再編が何をもたらしたか！？

日時：11月6日（水） 午後7時～午後8時30分

会場：龍谷大学 大阪梅田キャンパス 研修室

講師：佐久間 智子

特定非営利活動法人 アジア太平洋資料センター
理事

URL：<http://www.parc-jp.org/>



講座概要

私たちが毎日何気なく食べている食料・嗜好品、その背景には地球規模の需給の流れや巨大な農業関連企業が存在しています。貧困国の人たちがいくら食料を生産しても満足には食べていけない一方、日本に住む私たちも本来あるべき食料消費の姿から離れ、先進国でもある農業大国の政策に踊らされ、結果として地球環境にも優しくない方向に進んで行っていることを佐久間さんは指摘しています。では私たちは微力ながらどうすべきか、佐久間さんは問いかけます。

食料貿易から見た世界の国々

世界の国を食料の生産と消費、輸出入の金額の面から分類すると、およそ次のように類型化されます。

- ①大輸出国：(a) 温帯でヨーロッパからの入植者が大規模農業を経営。米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ブラジル、アルゼンチン；(b) 欧州先進国など。フランス、ドイツ、ウクライナ、タイ。
- ②大輸入国で先進国：日本、韓国、フィンランド、スイス。
- ③人口巨大で輸入輸出ともに巨額：中国、インド、インドネシア。
- ④食料を輸入に頼る貧困国：世界最貧70カ国のすべて。

③のカテゴリーは国内市場が巨大で、その年の作柄が世界商品市場における価格に大きな影響を与えます。

指摘すべきは「先進国＝食料を輸入、途上国＝食料を輸出」という思い込みは全く勘違いで、むしろ逆だということ。農産品輸出額の上位21カ国のうち14カ国がOECD加盟国、残る7カ国も途上国ではありません。一方、途上国の多くが嗜好品や香辛料は輸出するが主食の穀類は輸入に頼っているというのが現実です。

世界市場での価格と独占企業

食料品の多くは世界市場で価格が形成されています。先進輸出大国の得意な穀類、畜産品は価格が高く、貧困国の輸出品である嗜好品（コーヒー、カカオ）・熱帯果物（バナナ他）は価格が低くなっています。貧困国の多くでは自分たちの産物は非常に安く売らざるを得ない一方、主食の穀類は高いものを輸入するので、食べるに窮するという立場に追い込まれています。熱帯嗜好品やバナナは世界でわずか数社の大企業が市場を独占しています。彼らの市場支配力が強いいため、また彼らが先頭に立って進めたプランテーションの大規模化のため、これら熱帯農産品の価格は低いのです。フェアトレードはこの歪みを少しでも和らげようとする運動です。

近年の米国の農業政策と影響

1970年代に米国は農業政策を転換し、農業の大規模化・効率化を推進しました。日本でも同様の政策を60年代から導入し、米作への特化を進めました。しかしコメの消費減と増産によって生じたミスマッチにより、70年には生産調整(減反)が開始されました。結果として米国も日本も小規模農家はどんどん没落し、米国内にはいわゆる農村社会が見られなくなりました。

日本では、米作に偏りすぎて麦と大豆の生産が減り、これらの自給率は数パーセントにまで落ちています。一方大量に米国などから小麦製品が流れ込んだため、米が沢山出来るのに「パン食」や「麺類消費」が増え、後戻りできないところにまで来てしまっています。

食料は足りるのか? -- 効率的な食料消費、農地争奪

現在の見通しでは世界の食料の需要は2030年には現在より50%増、2050年には70%増となっています。これで将来の食料は大丈夫でしょうか? 考えるべきは、非効率的な農産品の使用をやめる/減らすことです。例えば穀類の消費先を見ると、飼料に35%、工業用に18%も行っており、食料になるのは47%しかありません。

非効率その1は、バイオ燃料エタノール生産の原料として穀類を使っていること。例えば1リットルのエタノールに2kg以上のトウモロコシが使われていますが、これを止めればその土地で食用穀物の生産が可能です。

非効率その2は、食肉(とくに牛肉)。牛肉1kgの生産に穀類12kgが飼料として投入されています。牛肉を食べる代わりにその12倍の穀類を食べることができるのです。同じようなことは大型魚の養殖の飼料にイワシなどの小魚を重量比で数倍も投入していることにも見られ、養殖マス(サケ)の代わりにイワシなら8倍も食べられます。

将来必ず食料は奪い合いになるということで、資金に余裕のある国々が途上国のみならず中所得国でも農地の争奪に乗り出しており、世界で毎年日本の全耕作地の10倍以上の面積が取引され国外の投資家に奪われていると見られています。

農業のコスト構造

農産品の最終価格におけるコストの分配はどうなっているのでしょうか。先進国の個人農家の例では、消費者価格を100として、資材の業者(種苗、農薬、機械)が40、食品加工・外食産業と流通が50を取り、農家の手取りはわずか10です。資材の供給も流通も大手企業がほぼ握っています。これで当然の価格だと言っていいのでしょうか。

これが途上国の農家なら手取りはわずか0.5~1に過ぎません。過去30年の間にコーヒーとカカオの価格は6割も下落しています。2000年にもコーヒー価格が暴落しましたが、この年、世界最大のコーヒー販売会社は過去最高益を計上しました。

今後の課題

食料価格がどんどん上がり、途上国の食料不足が進むと見られているときに私たちがすべきことは何でしょうか。最初に考えるべきは自分たちの食習慣を見直すことでしょう。それらをまとめれば次の通りです。

- (1) 脱化石燃料: 肥料の製造に大量の天然ガスが使われています。食料の輸送にも燃料が消費されます。化学肥料を減らし、「地産地消」を進めれば燃料消費を減らせます。
- (2) 脱輸入食料、脱食肉、脱バイオ燃料: 牛肉など食肉の消費を減らせば穀類を効率的に食料に廻せます。大型養殖魚の代わりに国産の小魚を食べれば効率的な食生活ができます。エタノール生産をやめれば代わりに食用穀類を生産できます。
- (3) 脱大手流通: 流通大手の店舗は上記の通り非効率に生産された輸入食品を多く店頭に出しています。国産品でもはるか遠隔地から持ってきたり、燃料を使って季節外に温室栽培したものを並べています。旬のものを地元でなるべく生産者または生産者に近い立場の店から買えば、身体に良い新鮮で季節感のある食事が可能となり、生産者の手取りも増えます。